

金属資源リサイクルシンポジウム

9月19日、20日の2日間、小坂町において「金属資源リサイクルシンポジウム」を（独）石油天然ガス・金属鉱物資源機構と共催した結果、非鉄金属、鉄鋼、建設、家電、自動車、IT、研究機関、商社、リサイクル、エネルギー、証券、報道関係者等、金属資源のリサイクルに関し、幅広い分野から約200名の方にご参加いただき盛会裏に終了しました。



会場受付風景

19日は、国や企業の専門家から、安定供給が課題となっている金属資源についての需給動向やその確保のための取り組み、更には自治体や企業のリサイクルへの取り組みなどについて講演をしていただきました。

基調講演2名、特別講演1名、部門別講演6名で、このうち金属資源の最終ユーザーであるシャープ（株）環境安全本部の谷口副本部長による講演では、液晶テレビパ



シャープ(株) 谷口副本部長

ネルの透明電極（国内のインジウム需要の90%近くを占める）に使用されているインジウムのリサイクルをテーマとし、インジウムの需要動向と同社の回収・リサイクルの取り組み、また今後の技術戦略について説明がありました。

液晶パネルの製造工程におけるインジウムの回収・リサイクルは技術開発の目処がつきつつあるが、スクラップパネルからのインジウム回収については、技術的には可能であるものの、現状では経済性が成立しがたい。コスト高のネックは、パネルガラスで、その用途開発の重要性を強調されていました。また、インジウムの有効利用のため、当面は使用量の低減やリサイクルを進めるが、2020年頃にはインジウムの需給が逼迫すると予想しており、ソーラー基盤で使用されている酸化亜鉛を代替材料として検討しているとのことでした。

液晶パネルの製造工程におけるインジウムの回収・リサイクルは技術開発の目処がつきつつあるが、スクラップパネルからのインジウム回収については、技術的には可能であるものの、現状では経済性が成立しがたい。コスト高のネックは、

パネルガラスで、その用途開発の重要性を強調されていました。また、インジウムの有効利用のため、当面は使用量の低減やリサイクルを進めるが、2020年頃にはインジウムの需給が逼迫すると予想しており、ソーラー基盤で使用されている酸化亜鉛を代替材料として検討しているとのことでした。



熱心に聞き入る参加者

トヨタ自動車(株)CSR/環境部リサイクル企画室阿部課長の講演では、自動車リサイクルに関する国際動向と我が国のリサイクル法の運用状況、更にトヨタにおけるリサイクルについての取り組みについて紹介がありました。このなかで、自動車リサイクルに関する法制定の背景及び意義と、リサイクル法の対象となっているシュレッダーダスト、エアバック、フロン の 3 点についてリサイクルに関するトヨタの取り組みの現状について説明がありました。



トヨタ自動車(株) 阿部課長

自動車のリサイクルは、解体業者及びシュレッダー業者により 80% が回収されており、残る 20% を構成するシュレッダーダストのリサイクルが主な課題。現在、解体技術の研究、リサイクル処理技術開発、リサイクル材(中古部品)の利用拡大などに取り組んでいるとのことでした。

当日は、講演会場と隣接してパネル展示会場を設け、企業や自治体のリサイクルに対する取り組み状況を参加者へ紹介しました。



20日の現地見学会では約100名の参加があり、DOWAグループによる小坂町及び大館市の環境・リサイクル施設と、秋田ウッド(株)の廃プラスチック利用新建材製造施設を見学していただきました。特に小坂製錬を中心とした金属リサイクルネットワークに見学者の関心が集まっており、質問が集中しました。



今回のシンポジウムは、金属資源リサイクルに関する情報の共有とリサイクルの今後の方向性、また資源の安定供給確保の戦略を考える上での一助になることを目的としておりましたが、参加者に国の政策、国際動向、各部門の活動に関する情報を総合的に提供できたこと、特にシャープ(株)、トヨタ自動車(株)という最終ユーザーから貴重な情報を提供していただき大変有意義なシンポジウムとなったと思います。